

古市古墳群の小さな古墳たち

〜その実像にせまる！〜

5 林の古墳群と、周辺に住んだ人々

林の古墳群は、仲姫命陵(仲津山)古墳の北側から西側の一帯に分布しています。周辺の地形について府道堺大和高田線(さかいやまたかた)を例に見てみると、沢田の交差点から東方向にしばらく行ったあたりから、国府台地の西側斜面を登る坂道になっており、上り切ったところに近鉄土師ノ里駅(はしのさと)があります。林の古墳群は、このような国府台地の西側斜面と縁辺部に造られています。

林の古墳群は5世紀前半から6世紀初めにかけて、14基の古墳が造られたことが分かっています。現在、最も南

側にある一辺20メートルの方墳、松川塚古墳(まつかわづか)のみが墳丘を地上にとどめており、発掘調査では円筒埴輪列も確認されています。

ところで、林の古墳群の周辺の発掘調査では、特に古墳群の西側で、同時期の人々が住んだ家の跡が見つかっています。地面を掘りくぼめて床とし、柱を立てて屋根を葺いた半地下式の建物です。これは竪穴建物と呼ばれるもので、これまでに15棟が見つかっています。

15棟の竪穴建物には、どのような人々が住んでいたのでしょうか。まず注目



▲林の古墳群 分布図

したいのは、建てられたのが、林の古墳群で古墳が造られたのとほぼ同じ時期であることです。このことから、古墳造り、あるいはその被葬者とかかわりのある人々が住んでいたと考えられます。しかし、15棟のみであることから、古墳造りの土木作業を直接行う多くの人々が住むには数が少なすぎるようです。被葬者がリーダーを務めた集団の住まいであったか、あるいは古墳を造る際の作業監理などを行う現場事務所のようなのかもしれません。

今後、さらに検討していく必要がありますが、もし、被葬者がリーダーを務めた集団の住まいと考えられるなら、自分たちの首長を、住まいの近くに古墳を造って葬ったことになりそうです。いずれにしても、小形の古墳に対して周辺で生活した人々がどのように感じていたのか、興味深いところです。

林の古墳群の周辺では、これまでもご紹介したことのある、船首に鳥がとまった船形埴輪が見つかっています。これは竪穴建物の隣接地から見つかっており、そこに住んだ人々が埴輪の古墳への設置にもかかわっていた可能性を示唆しています。

さて、現在、文化財保護課では、林の古墳群の一つ、沢田古墳のこれまでにに行った発掘調査の報告書作成を進めています。沢田古墳は、墳丘の長さ28メートルの帆立貝のような形の古墳です。墳丘は平らに削られていましたが、濠の跡から、靴・盾・甲冑といった形象埴輪が見つかっています。今年度中に刊行予定ですので、ぜひご覧いただければと思います。

(文化財保護課 新聞 義夫)